

山村の「発明」

区別される「山村」とは何か

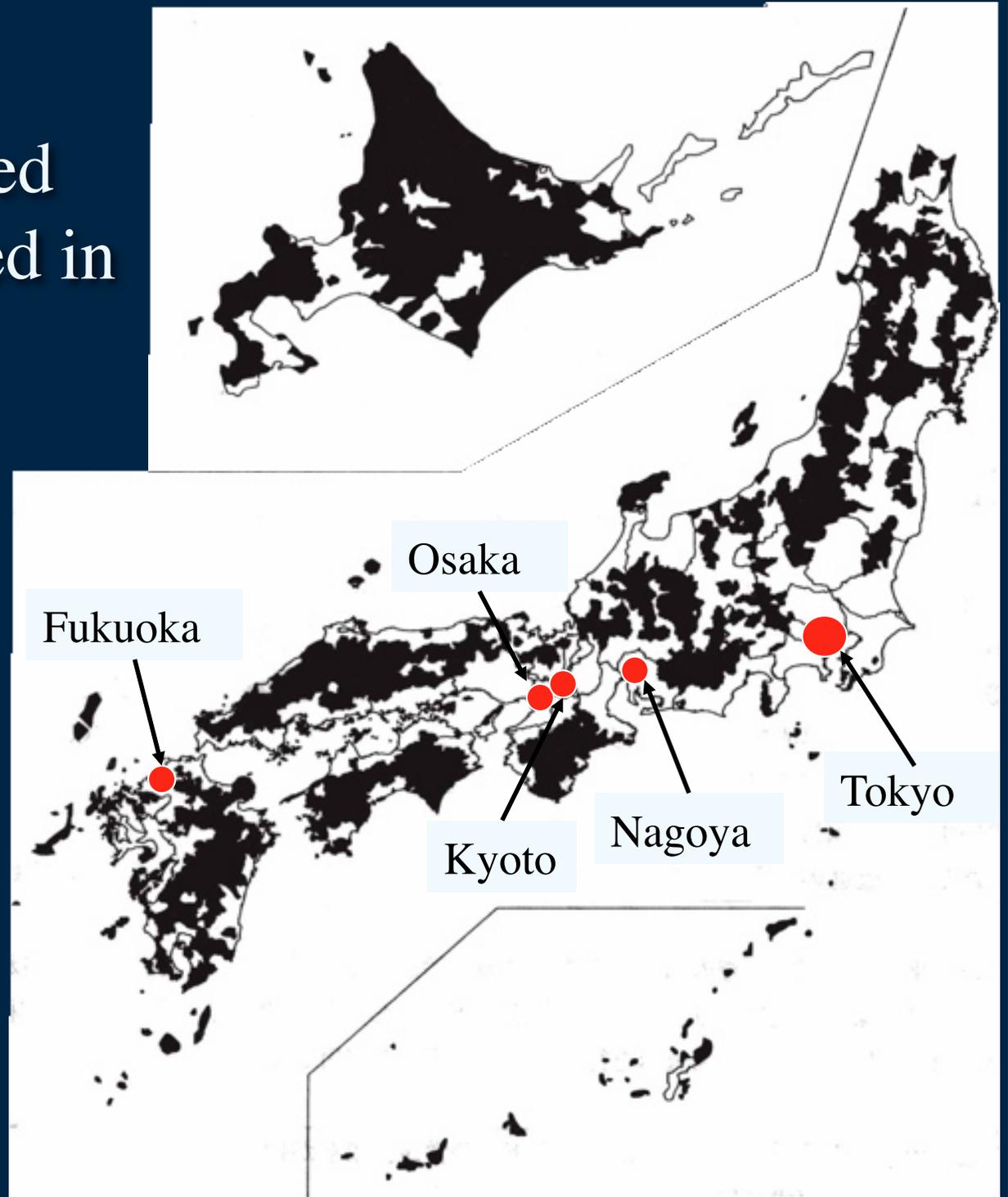
秋津元輝「二〇世紀日本社会における『山村』の発明」
『年報村落社会研究』第36集、2000年11月、を中心に

農村社会・社会学特殊研究 第9話

秋津元輝（農学研究科）

Fig.2 The depopulated areas in 2002 (painted in black)

- The areas where their depopulation rate of the period during 1960-95 is over 25 or 30%.
- They occupy 49% of the whole area of the country.
- They spread mainly over the areas of mountains and small islands.



「限界集落」問題

- 1988年 「限界集落」概念の提起
 - 大野晃(高知大学教授:当時)
 - 集落人口の過半数が65歳以上
- 2007年 参院選で注目
 - 「水源の里」(綾部市→全国)

近代社会システム形成期としての 戦間期

- 階級社会からシステム社会へ
 - 身体システムなどへ
- 階級対立の社会的制度化
 - 教育機会の拡張による階級間の流動性の制度化
- 国家と市民社会、家族と市民社会の境界の曖昧化

(山之内靖「方法的序論——総力戦とシステム統合——」山之内・コシュマン・成田『総力戦と現代化』柏書房、1995年)

山村の定義

- 「山村といわれるものの多くは、実は奥まった農村にすぎない。」(7頁)
 - (千葉徳爾「原始山村の変遷過程」『地理学評論』23(11)、1950年)
- 「山地の住民とは何か、また彼らが居住する山村とは何かを、はっきりさせる必要がある。いまこの二つを、山間の集落とその居住者と規定する。」(80頁)
 - (松山利夫『山村の文化地理学的研究』古今書院、1986年)
- 山村概念のあいまいさ

政策対象としての山村

- 1932年 農山漁村経済更生計画樹立方針

「『農山漁村経済更生計画樹立方針』ハ...農業、林業、漁業ニ大別シ仮ニ之ヲ農村、山村、漁村ニ分チ其ノ綱要ヲ示シタルモノナル...」

(武田勉・楠本雅弘編『農山漁村経済更生運動史資料集成 第二卷』柏書房、1985年6月、155頁)

戦後の法律

- 1965年 山村振興法

「第二条 この法律において「山村」とは、林野面積の占める比率が高く、交通条件及び経済的、文化的諸条件に恵まれず、産業の開発の程度が低く、かつ、住民の生活文化水準が劣っている山間地その他の地域で制令で定める要件に該当するものをいう。」

最近の法律

- 1993年 特定農山村法(特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律)

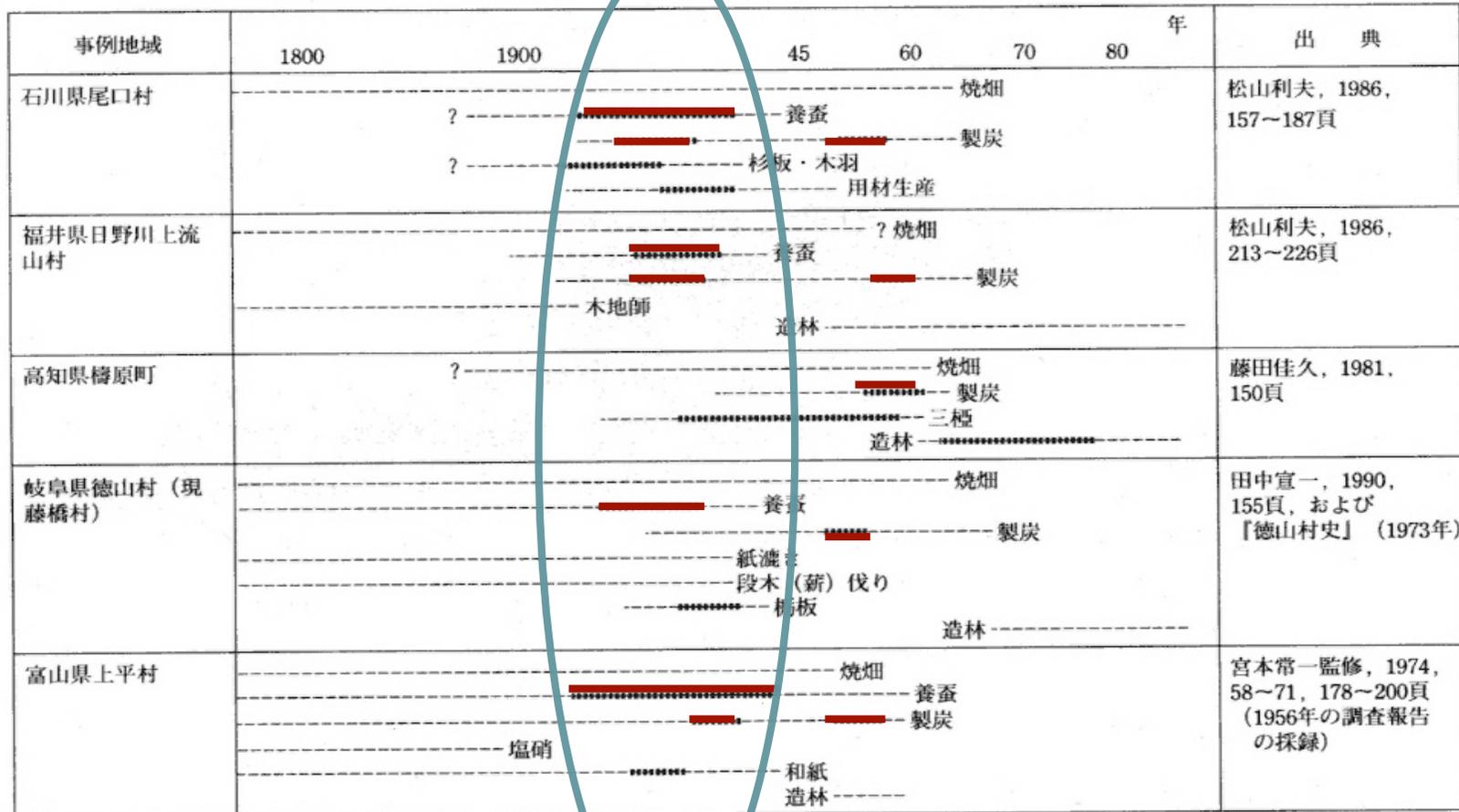
「第二条 この法律において「特定農山村地域」とは、地勢等の地理的条件が悪く、農林業の生産条件が不利な地域であり、かつ、土地利用の状況、農林業従事者数等からみて農林業が重要な事業である地域として、政令で定める要件に該当するものをいう。」

山村生業活動の時期区分

- 「さまざまな生産活動が形をととのえ生産量を増大させていく、近代における山村経済の確立・展開の時期」(158頁)
- 「二つめが林野を生産の場とした各種の資源開発が次第に衰退しついには消滅してしまう時期(中略)である。」(158頁)

(松山利夫『山村の文化地理学的研究』古今書院、1986年)

中部・四国地方山村の生業の変遷



91

図1 林地を利用した「山村」生業の変遷

注：太線は最盛期を示す。ただし、出典によって記述や評価にばらつきがあるため、おおよその目安と考えられたい。

出てくる山村の位置



全国木炭生産量の推移

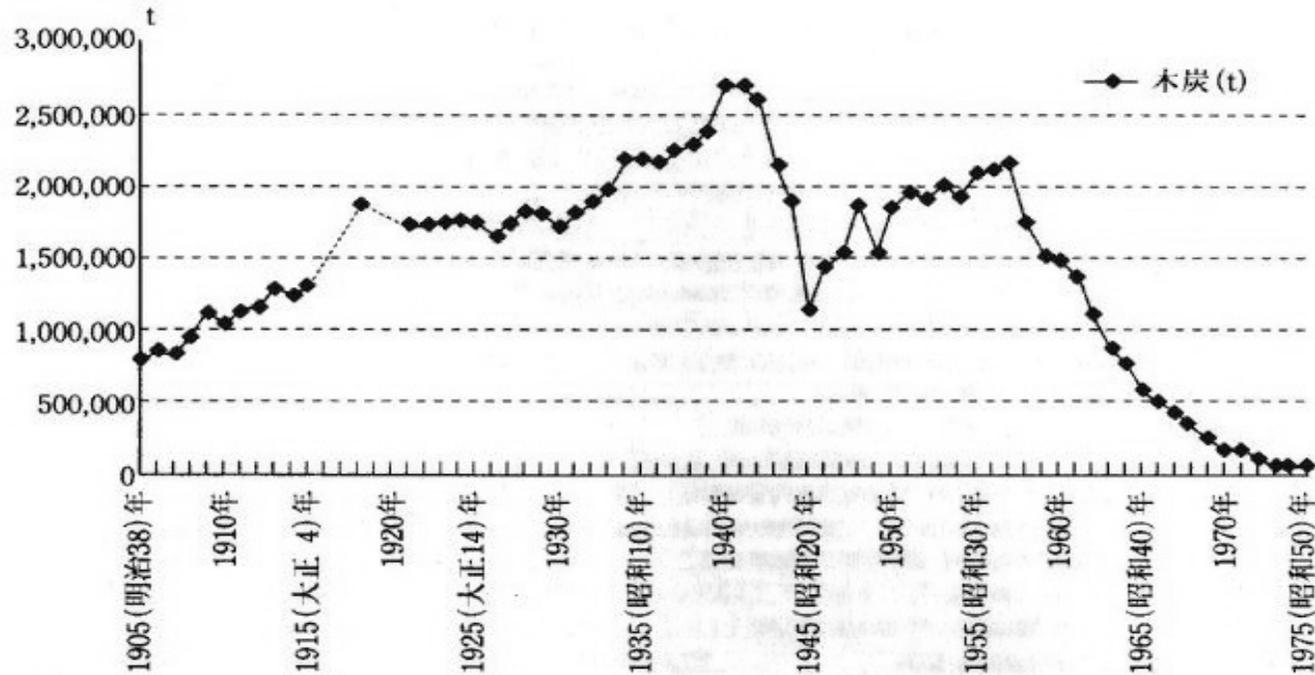


図3 木炭生産量の推移 (全国)

注：1955年から自家消費を含む。『日本長期統計総覧第2巻』（農林統計協会，1988年）より。

白炭と黒炭



- 木炭は、大きく分けて「白炭」と「黒炭」に分けられる。紀州備長炭は「白炭」の高級品として有名だが、この「白炭」と「黒炭」の大きな違いは、炭を焼く時の窯の温度と焼き方にあり、当然炭の性質も違ってくる。白炭を焼く技術は非常に難しく、古代中国から伝えられたとされていて、今でも白炭を焼く技術をもっているのは、中国や朝鮮半島の一部、そして日本だけだ。反対に、黒炭は世界中の国々で焼かれている木炭である。

近代山村人口の変化

二〇世紀日本社会における「山村」の発明

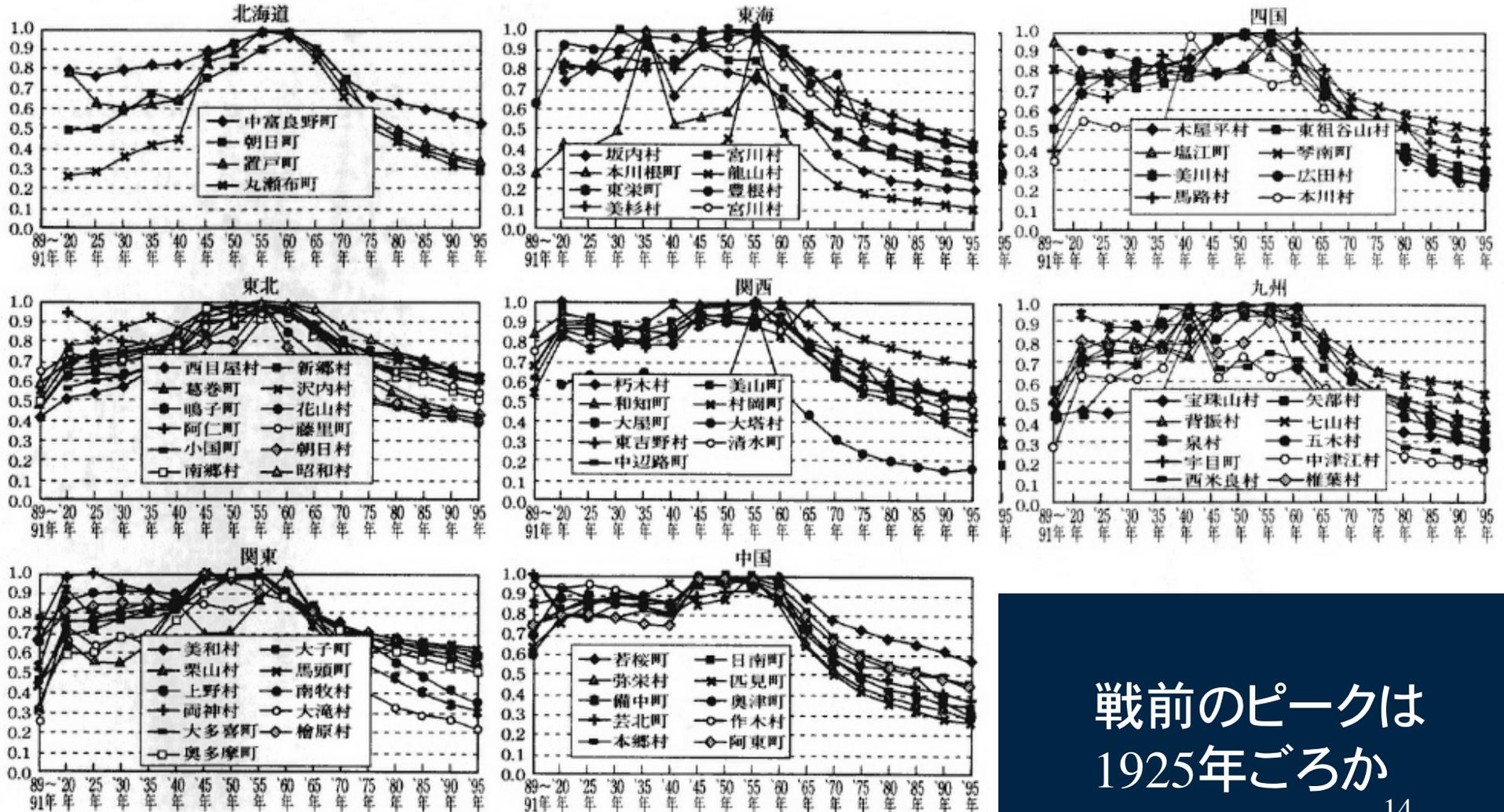


図5 全国山村人口の変化

戦前のピークは
1925年ごろか

第一次大戦戦後恐慌と山村

岐阜県上矢作(旧上村)の場合

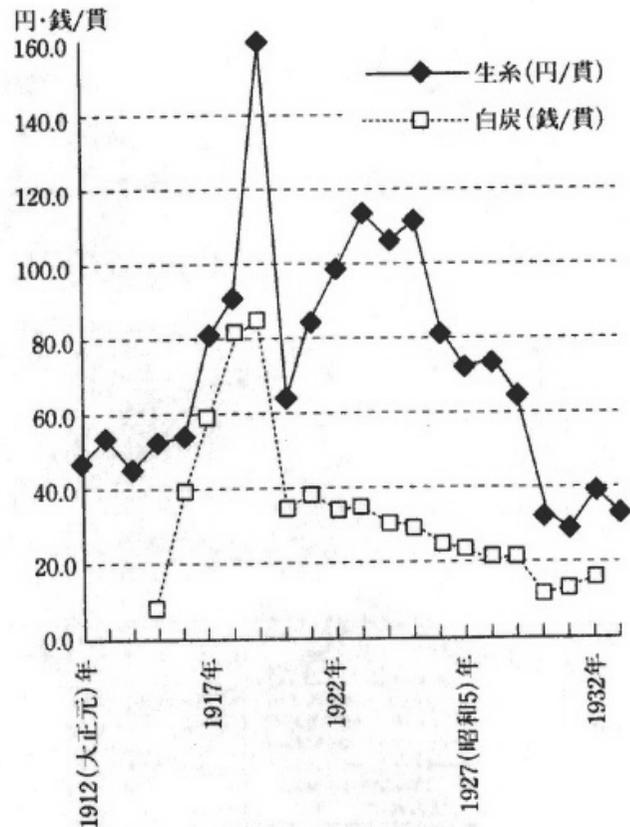


図6 生産者価格の推移 (生糸・白炭：上村)

注：「かみむら」「かみむら」編集委員会，1963年，より。

二〇世紀日本社会における「山村」の発明

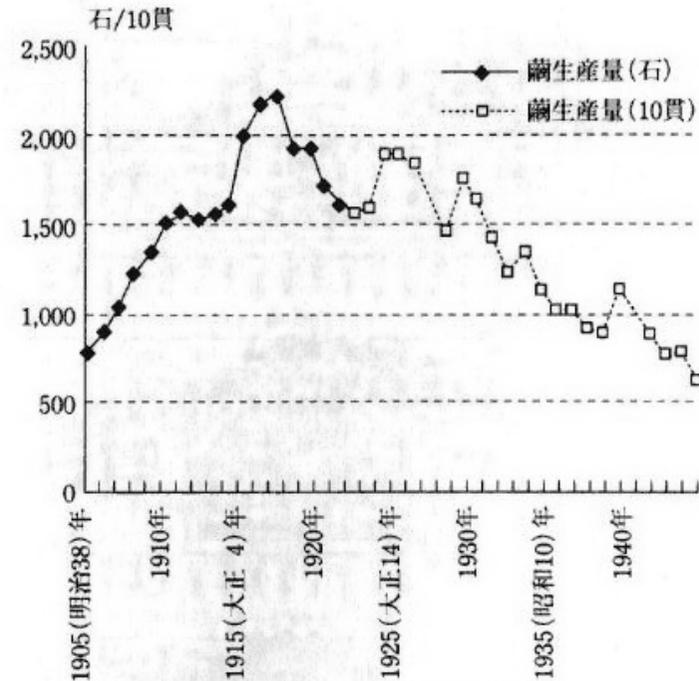


図4 繭生産量の推移 (上村)

注：1905 (明治38) ~ 1908 (明治41) 年までは、「恵那郡是提要」岐阜県恵那郡役所，1909年，より。
1909 (明治42) 年以降は、「かみむら」「かみむら」編集委員会，1963年，より。

政策における「山村」の発見

- 「山村ハ農村ト其ノ成立ヲ異ニシ...現下ノ不況ハ其ノ主業トスル木材、薪炭製造、副業タル椎茸収繭ノ如キモ価格惨落ノ為山村ノ苦境ヲ一層深刻ナラシメタリ。」
 - (『農漁山村ニ於ケル生活困窮概況』内務省社会局調、昭和7年8月)

新聞記事における「山村」

- 1934～35(昭和9～10)年に「山村」の用語が確立
 - 「農漁山村」(朝日新聞)と「農山漁村」(政策用語)
- 木炭産地としての山村

戦後の山の景観

- 草山から森林へ
- 広葉樹から針葉樹へ
 - 天然林からの転換



全総計画と山村

全総(1962)

- 「農山漁村」のかたちで1箇所のみ(42頁)

新全総(1969)

- 「人口激減山村」として小見出しとなる。

三全総(1977)

- 農山漁村を「都市周辺農村地域」「農村地域」「山村地域」「漁村地域」に分類。

四全総(1987)

- 活性化の対象としての「山村」

五全総(1998)

- 活性化、森林、などとの結びつきが強まる

新たな国土再編

- 20世紀システムによる国土区分→21世紀の国土区分へ
 - 生業利用→産業主義→?
 - 観光の対象としての山林
 - 流域による都市－山村連結
 - 存続問題